萬歌千代の初聲

へ13
2936
1

黄鶴塚千代廼初声初編叙

語くは倭の手ぶりへ家から歌より倭詞をのせ
鶯の鳴声やうやく古へもの々拍子を上げ口細
陽春新来読て毎年新春するごとにぎ
童も称す童も百千鳥を愛する長柄の
男が心の風雅も思ふべし爰に黄鶴塚の
語は鬼卯ねりが楼の家満四方の耳目をその

早稲田文庫
匡 七十九号
へ13 2936 1
特
ヘ13 2936 特 1-4
9-7-9

言を寄すむなりとしなしが、こゝに悪を借りとなしぬこゝにその間て
手練のいまだ三毫を今様の風に擬て幼稚児
にもちかく読易きを旨と編ならべまき一葉ならず
あらで屋を潤しすゝびつの蟹と咲んと侭さき
れて瞬も物ぞ筆は操れど数学の行言まづり
なれ人は今の寄き鳴猫しが、其行数での
多おかあれども時好にまゝ人来らば、朽のばらう。

作の時のあらはば衆と錦画役は粉年の作行
不鈍不臆初編の亡すもをは譲りて手ぬ櫻
にもつゞき出板して二編三編のその巻々は新
趣珍説奇とぞ呼びなりつゝ、やがて野蛍るをを見
汗しるして、かゝる拙き冗貝を顧みて書きん

独着生の於のゆ誌

[illegible]

長者の女児
於梅

孝心貫天百
折千磨
竟討離揚
名於萬天

河内鴨野の郡司の子
助次郎零落て
非人となる

梟鳴松
桂枝
狐藏

○佐々木源太左門實頼
廓ゑ遊びて帶大盡と
いへ

○長柄の長者ゞ甥
重三郎

蘭菊
叢

大鶴屋の
遊女
九重

長柄長者
第の図

鶯塚千代迺初聲初編巻之上

東都　松亭金水編次

第一回

むかし人の世の栄枯盛衰を糾あざなへる縄ぞ糾縄とは糾ときその一筋右より上ぞ流むかしとときたまへば。忽地ぞ方ちまち変て下ぞ沉むぞ。をりをりのあるべし。土地い摂津ぞ天満の名ぞ。むかしへ今ハ北の堀ぞ。且その名ぞ呼へ来るとど。今ハ人市の例ぞ。あるとけんとの沈いまぞ草源くしく。往来

と絶ぬ繁華と人ど人の家居も稀なるゞ慌の大松
を便りて竹の柱小茅の檐二尺ばかりの赤土の小屋
ハ。そこも知れず野徒の兩妻淺ぐ設けあると母子
と又ゝ年の比十ばかりの大年増女と十九ゝ二十と見
る弱冠。襤褸をまとひ足元垢だらけ裏をしる。
姿ありども彩ある果ぬ。ふお床しき人柔和ふかけし
小鍋の下。落葉あつめて竹火箸にて煙るを消ぶゞ
「男」「あるゝども食を三日ばかりとぶ忘れあいとらんを。
よく人もまちしまたぶ彩して徒素の杖ゝ携りて間の屋ゝ入ハ
二百の旅ゝ疲ゝ二日ばかりまたゝ左指して又ゝ二日ゝ之
日。雨ゝで疲て居ても彩ゝ旅ゝ食ゝ交ゝまゝ出
ゝで疲ゝ又ゝ指ゝ乳樂ゝあゝまんまいゝナ。サアゝ樹ゝ
出来ゝまゝ此ゝ係まゝ何ゝあゝ。完刈又ゝ芝ゝこの
月刈三三把買ゝ束ゝ束ゝ束ゝ焼ゝあげませゝ「ナニ
吾倆ゝ丈ア宜ゝ有ゝ絶ゝ有ゝ年ゝ若ゝいゝゝ
小袖一枚ゝ束ゝ二ゝ裏ゝ切ゝ肝心の脊中ゝ腰ハ草

りの小あつて居る仏様、結つてしまりへけまどをあうち
若交るのいあ〳〵ろへバホンニ石川と源吾めが限りの吾
俤い女おあいまぐ。年いつぞ四上の容子めあ〳〵おいと見
孫めて。老爺さんが石魚の四最初。その敬さへ誰とも志
まづ欲いて居る前へ来迎こその咎ふつくおあと両個
を門お拂ひふまるといつ。非尼おろ世小あらうを主
しいつも源吾めが家を押飛まる巧こ石川ぞへ取入
て今回の強ぎを僥倖ふ。吾俤等を逐出さ賜さ。

アノ時吾俤い悔しくッて。怪い赤いまでも源吾めを一寸刀と
思つぞ。イヤ〳〵まてが待へ前ぞ。左様さまぞ各〳〵の。胸い晴る
やう赤りの。何をいつ小も石川ぞめが上を蓋ふ計ら人て。上定
小背いろ何ぞと云て。万一おあを逃こへでも。若ろまる様ふと
でも出来るこ。敬を素様るを阪もあ。まづ〳〵おい場
悪こて。後小何様とも仕やうがあらうと。寒〳〵こうてお
あこ去個。逐出されて見るこ詮方ふ。まさを前
小居〳〵まもせば。おく〳〵考て神元こ。ホンニ孫小ろ

ゆちくねぎでいかいうとっくんのサト咲く代方ゆふ返り
男あるく
「平く癌い勿論私くてゆ。仏の指ふ悔しのう知をません
ぐ。社仰通ア行をゆ。四上ようの四沙法くあれぐ。
処を彼見まうさをぎ。その俗ふ引取まくぐ。家ふ
傳いる物日九。振刀だうい指く出て。コレの通り竹
杖の中ふ仕竜でおきまくぐ。後日敬を討おうせ。
下くを四上へ出て。再奥を殺ひまくぐ。四出緒ゆ
ある佐くゆの家。まんざくゆ文ふ。ふゆまうりうんまい。

敵父の源吾くのが悪巧くで。石川どのくらひ合せ。家をぐ
押佐いくて。四上まで通くて乗る。この振刀がふの日
ふい。佐くゆの家智くふいをまんまい「ヲ、よく文ハ
くゆがふく。吾俳いまくゆ家の系。くをハ大事くを
下ふ。懐へ隠くて出く。左指くて文をぐ源吾ふ。
命の中ぐうを。今ふ何指うふるぐらうト両個が結後
をのくて足をぐうめハ河内の郡司ある。佐くゆ源左左う
ぐ一ふ源くを助。その妻ふ佐くゆ両個源左左う

ぶ不思の撲死ホかく奏蔵い世りのあり「ホイく結婚
ホ気をそくとて。お謝ぐぎう飯ホあつて。くく和くくで
彼ホひつくる気老ひあり。サア冷あいうち上うまト盛て
出せば「おあの飯ホヨ。ヲく注加減ぶよく出来て。下図の
業い流ホで。壺出来るくいんが遠ひあい。竟ぞ来一合
で。禁くくみのあいおぶけまど。この頃い主ふホあつて。
成ぶど月刹ホさんぶ宣ト両個い飯を食仕まく遠寺の
撞鐘日没を告。塒ホ帰る鶏の賀。唖くくて物寂し

「サア義母さんお休ち。世お腰を揉ませう「ナニおあのも
弟弁さのホ宣ホて森結ひホ。仏中ハ寸白の研為うぶうも
腰ぶ引ぶ。て切ホうくぶモウ快ヨ「何と云ても下冷ぶ
いくさくくでぶいまて。ナニ草弁いくません。サアく揉
でおぶませうト揉く揉で居るうちホ被物さんも落けれ
どの仏別て敵味と。森まぶたの刃も傍そして。労ま
まホ熟睡まる。眼覚ねぶぶぞ蹄の帳も綾の衾も
との猶褸もかくぶざくて浮世事と。その次の日も

おうめ
おいく
お梅様の御ふ
ろうぎ食ふ金と
あて

源之助

朝服を仕まへバ徐くこち出て。従来の人ホこう携フ。一殘
二殘の合力うけ。ゆえ史氏とまかり入須臾にして来る一嶽
あり。是ハ何方の精神ぞと涙こ助ハ侍ホ対を修せられ
バ供人十四人名的歴ある女亦趨史ホ引そふ侍女。
艶葉ある衣数名て。徐くと来りしが。暴ホ侍女さらぬ
こち「アレサ早く逐てかやうヨ」「エヤ」乳味の恐い怖い眼と
きて。吾俤を白眼つけまくふ「ゆゑ子手振ホ怖いうエト
三人四人立強く。涙こ助ハ行ぞと見るホ。一羽の雷こ驚ホ

逐きて。脱ホ元き亦勢ある。一生懸命撞潜アとて。
涙こ助ハ猛襲の虎狼。矢庭ホ閃うと飛迎きう。暴
ひ来るハ鶏鷹の。是ぞと指らる疾き竹杖。こう重
きて下こ打ぶうれて驚ハ侍ホ落る。この時件の侍女
ハ。逐ちつて眺く月。涙こ助ハ懐へ飛入こうし雷を。そと
捕へて「ヤ狼ぞこの。お尋孤あさるハこの雷ぞ。左振ふう
バトさう出ぬを後ろ来る侍女ぞ。高蒔絵せ香箱と
かく「ヲ唐琴ハ後見ウエ。ヤレ〳〵涙雲ちいるゆぞ。ト

かの香籠ふ入まて殘く先へ来りし侍女。年頃二十ばかり
ありて。姿状も美しきが。莞爾らして侍へう「てよく助けて
下さつた。アノ長柄の刀を取る。演左衛門」と。つまつて人形使
いまもまを敬とらんものの。けんかいお娘四のお梅さまが神的へ
糸清。アノ若いお梅さまの四秘蔵よく別て居ました。
弱い在て出放し。阿。お連あさまと別。変に逃まて
彼をつ。脇小攫まもつといふてことをおおのお蔭で助け
らまと。お梅さまが。吟味さで。お教びでございませう。われ御

がありまもつつ。坐結て居て下さいと。拾て弦屋へ
去が。留の心底をこりあつて内より新をさ出ました十七八の
婀娜女児。紫麝香の薫郁と。廣き野路を匂
いて。その新だせの清らさ。雪小者りを副うごとく。
嬋娟たる美女あるが。こを妻時うち膳を。行ぬ
密々低語て。侍女お敬いまと弦来ると「當の命の親
ぞの四つ方四神でも。おさう安と仰けもど。途中の
こでお心ふ。仕せぬおぐつ有合せ。少しだつつお礼ふ

あげる。そして娘さま仰ゆまつる日のうち神
明さまへお参りハこの通り物ごうで出下ゆまつる出て。居
おさるあうふと法作こうぎ。ゆまいと。ゆうて在て
のこりであらう。必ずお出でお在ヨ。こうハ〳〵彼式お菌
招おお礼を頂きまして。深おかれてこまんぐ四境の通り
人さまの。お慈悲で助る。浪人の私。四辻ハ申ません。何
卒宅〳〵まお招こう。お礼を仰て下さいまト土おみを
ちく一礼。時世とゆへど見非ゆあ。お教い点改「ア、左根

ヤスヨ。おお佐度との次小ゆ。百遠ゆあく出てお在ト見く
いつて立まるまバ。輪丈ハ駕を舁あげて。天神橋へとさ
かる。お梅ハ駕の小窓よりつゆある限り振返ると。名残を乳
小界まゆく。深こ助ハ。ひゆ。紙包こを抜きて見
まバ。小粒ゆて金三両あり。我ゆもあるでうち踏き。百い
紙で巻こうまバ。書こゆ。一番線の四ツ五ツ
ゆ。あるこゆひて。黄ひ〳〵ぐ。三両こハ多のこ。跡逃うけて
逃さうこと。脱ゆ左足を踏出。あぐうゆ。ひ逃ずバ長柄

にて演氏といふ長者のことなり。その女児が三両の金ハ此
方の二文が三文まで返さんとも一圓見いださるを假病をこしら
へハあるまいと招きて見ればかれの障子破れ竃まるづけ
先ぞ面倒とのまゝ帰りて母人に告げ。歎かせてし逆数に
小屋に帰りて預くし。縫まで母も大きに喜び「此船か
よろ昔職にすまで事なき境遇をれといへども常とかう。
んがけよく親孝行を。皇天さすハ四海ぶで箇船いふるやも
あつのぞうら下母子倶に満面に笑をふくみて歎びけり

第二回

かくてその翌日源之助ハ来味噌なども貰集めきて
小便くしその日くの口拵ぎまするハ道具ど肝心の。設
のなかりしと知るよしなし。然ながら翌日会ハ物がなけれバ
是非もなくさんながら日を過せしが。零落たる境遇
にまづ差分合ふハとまらん。風に吹バその散ゆ。仿く葉と
名家ののよし一体其国の君なまれど主用なるで家に郎に
在し時にかゝりて日あうきれバ翌日より家類に立職をれ

うあるうぬう探つて又さて。十日ぞうとハ滑くとゆとて一人で
在せよ。しいふおきうちハ点形て。まづ行より由大るゆ沢。
らで扨ふんを送さん。寄祝て美由為ゆて。あう。早く年
を遂ぐ。ういしいて潔ようき接拶ふ源と助ハ勇を立。
翌日とまうち出されど。ゆうまへ徒ゆまあの空ふ。猟襖を
きて。ハ非人の姿。紋合の悪きゆりぞあんゆ。苦くとゆ
神牙頂。拵ひ。ゆを求めんと三條の古を屈ゆて。煙
紙きを又結ひ。そまを美うへて系の町くぐぶうくと

二三日ゆ形て物ふ乳ハ美ゆ。一点ぞうゆを撫りあく。
廓ハ人の入廻む前。仮宅を拵まぎきのふ由あくぐと。その
翌日ハ角原の廓ふ入つて寄ゆまど。新ハ素ようゆ名をへ
ゆ。定うふ知うゆ祝ゆ俗ふハ雲を拭むの茶へふ知てんい
きうふ楽。まゆど。子遊廓の張ひ。言葉ふ述ぎ空
由ふ。揚屋うの形毎ふハ。ぐくの丸提灯。蘆州まで
ふうけ連祝。座敷うの銀燭ハ。川色の星ゆ由遂まう
ぐく。幇間末社ゆ言笑ゆ。並ゆ欧枝ゆ弾こ法二挺

鼓の拍子よく。連節に絃ふ浄瑠璃端唄に紂王妲
夜の酒宴をこそ摸せしなれ。それより下年まで二十
一二の歌妓と見えて婀娜めきし一人の美女を在しが。
容と見えて二十四五の艶男その摸所より出ると等しく
美女が「アレ憎らしい人を待せて何処の穴へ這入て居
るじやヨト詰りて男に怕らせ。思ひきや逃出んせ。
女ハ男が袖引とめてもふり拂ひて逃出んとせず不積
ならば下駄の音高く迹を追ゆき清男の足を取れ

ばかり二三間遠ざかる女ハ男とは知らず跡より追かくる其の御含
後に挿たる玳瑁の釵の落たるも知らず源之助ハその時に
かの女の跡よりゆき。先釵を拾ひあげ「アモシ〳〵釵が落
ました」ト声をかけても耳にも入らぬ体にて其の男を追ゆく。
源之助ハよんどころなく是を拾ひけるよと呟きながら。まして
早足に追かくるに。続ける茶坊の庭切戸を開きて
逃込だり。されば源之助も続て入り「モシ今あなたへ這
入なさつた女中にお渡し申たき物がございますが」ト

いへば奥座敷なる女中イ。アイこれなんて奥へ行き「が程も
あらせずいざあの女子供のおをあいせあげ。ものきりく
出て来て「ハイどなたでございますか。何の用ト問ふけるを
「イヤ吾儕い通りがゝのもの。今おあがり遊ゝ御食ぶらの
箸を貸し。あきのつさう。人が踏でもまるゝと悪いと捨り
て跡ゝ袋をうけて。内外ゐで愛の宅べ。逃入どゝ
拾て来まゝ。サアお渡しまゝしまんト出せば女い莞爾
して「ヨヤ〳〵左程でございますまいと。一向と気がつきません。

ちつとも人ア大きおゐごゝゝト叙さらて有。裁き「マア何ふこと
おあ招ぎ方へお上ルおさいまし。此通り取紛で。二階も一ぱい
おあがり。お揃ひ中と。日出来ませんが。まづてお茶でもあげ
まさうし。云捨て奥へうけ入る。涙を助い便ことこてふあるべき
と有ゝ私ど。行方を尋て捜ゝこゝ有く。俗も何ぞのえがゝと
と。ゝへば。全処ふ流ゝちかけて。二階の絵ぎを使ふあがゝ。アく
と。ゝへ人の対の上いと。且ゝりどふ由。遠ゝ人の。二家手金を拵て義
をかゝせる大盡あ且ゝ。ゝ参ゝ流てゝで一服を。食さん入ふ

住せれあり。然るあだしごとの大盡とぃふるものゆ黄金の俵
のこ。俵と豆を失へば。我こゝおもゞ姿。樂〳〵極まりて長
こと生ぜんと。往昔の人ぃ云ぁさけん。今日の大盡の元食。
行ぐ宮まることあるんと。然れども恩あ〻て在けるゞ俵あるぃふ舍
ふれ。家ごと活を窺ふこと打こ活殺ゆて惜こと喞ぃゆ意
ゆ多と。いまるひぐ志ぁるさ男と女。什麼とぃ実ぃ重こ弟子。
長話云者の猶ぁるゞ。物ぁるびの為ぁ糸賀ぁ。遊笛の
徒然ぁ。不図活ぁの廊ぁ入ゆて大鶴屋の九重と源く

契ゆて通ふぐぁ。英金ぁ沼る容の書。叔父の長
者ぁ稼くの。俵いひて多合の金を送つて世ぁ〻ふぐ。
ゆゆ失ふのこと。虚こゆとふと長者ぁ知ゆ大
ぁ沼りて勘当の。ゆと。果〻長〻さ。かくまで深き
九重ぁ。ゆて愛て多ぐ。千茲とぁ比弟大盡と。
廊の損名ぁ唱へる。北ぁ方の武家のよ。日と多く疾
と多〻九重ゞ。許ぁ通ひて金盛をつくゆとぁ九重
ぁ。ゆこと弟ゞ身を業ゞ。ぁ者〻ゆると武さ。ぁ古ぁと

せずして且著作。失のこと拍木塞へて。文木浮らる。新も
せず。幣を務める九重を。濁て入れ。帯用木欲抜。
彫家浮拙理ろう。その脇の藝人引つまて。金木泡せて
芝灰の拵び。その上木この頃い分名ひけん九重を。揚結木
こと偽を離さび。さてとび金を。第由灰毎木まつと。揚屋
のもこを立まつり。そをとび便宜を伺へども。容易新さいる
とあるぞ。五木焦ら心の程子方兎量の名人を。揚
屋の女児小稼ぶ。重三第を小る金木思ひ出。大変

黄昏ろう。酔蕩けて疲るを入池。香の水吸ふ名木
まとも。金て話しを考えび。胸八勝ぎとせあてのの心作
木ろうあと。粋木捌小両個小欲び。九重、密と来て。泣つ
笑ひつ渡るろう。マア吹木ます。来由宮ぶ。どうせ廓小亜さ
月木更ア。月已ぶ月出木あろう出へろう。在所へ金をどろう木出て。
その金の来次第木月稼を考ることいふてござりんぶ。モシ左振
あつて私さ更アまア。伺振せろうと思ひまして「左振ろうや」
大変ぶ。月已も元の第で乗りや。どん木浪乗ることとてあろう。

源之助

げんのすけ
源之助
茶屋にいる

二面をしめ合のでも孤へがつ孤ろ〜ふぐろ今の才ぢゃア。一去ゆ
むづろ〜いのをいよゆ金金づく。モレ左根ちの〜ろ絵方が出へ
弟と母ろの前へ往サ九「アイ丈ろ左根〜ませうョ。おおさんも気
楽ざれエ。往サと云てオイ。ソレと。往て来ます位ろ。此根ハ気ハ
探ますん。おおオ丈で宜ざるエ「屋ろ〜ろ自己ざッて。
宜沢ハ分けとど。の根ゆ実ハ往方が孤へト塞ぐちの孤晴
ぐろ。ろ〜ろ。沢き孤で変ス晴ら世一私きゃア実ハおおさんハ。
死とゆい位ろ。モウこの世ハゃア居ますいと。頼ろ受性をセ

居るけとど。おおさんハ行時でゆ〜。行ぐろ深気ぐろ居ぐョ。
此方でゆハ位ゆ名ハゆ。ゆ〜ますんろ晴〜ろぐるん「イヤ大
遠へ〜。そりゃア此方でハろ〜。死ねとハろ〜合ゑハでゆ。
新ハ死ろ〜ハのぐろ。見わぐ。悪い紙ハ孤へ「丈ぢゃア死で
居ハゆ居ろ「死ハ孤へで行根ゆ。ろ〜ろ孤ハ孤ぐろ
主。孤ゆとハ分ゆるのろ「ヲく晴ハ見ろ世根ゆゃア。ろ
ゆい両個ハ。ハて合ゑ死居ゆ世ろ「そりゃア孤の晴でゆ解孤ハぐ
ぐ。ゆゃア候ハョ居ゆろで両個ろ死ぐゆろ。形角静を通て

甚で。小桜が迷惑するまア是も様ハ殺さうと。心が有丸重へ。
身請すると云るので。五十両百の金がいるし。綿合部でも稀
でも。左様出来るもので。左頭人金を取ふ来といふの
由なんの世話でいらう。互に死なうて覚悟の上ハ何ふ由急く
といふ殺さハよく身請をされてから死だって。遅くハ殺さ左様
するもやア稚さへさきらず。恩を仇て大難を人も換まうけ者へ
で義由五左理を且まで辞ぶ客人を含秋のいて且が勤め。
をチりんアもやア死ね といふ。モウ些伸さぶ道よう一筆といふ奴。

強盗に五面のハ客ぞ。平の名ハ行と云て左頭ハ何処ぞ
使ところ一左頭ハ今ハ加賀でござる。獄中で平のお待で平の
名ハアノウ作く木行とると云ますヨト 使て世方の縁と助出
まで作と木を名乗るぞ。ハ尋ねる歎の手がゝり行振ハ人
物風俗。見と取りの見と当ハ仇由。両腕組で入来る二階。
暴に階子をくらくと騒ぎ人足七八人。見ふ庭ふに入合
へ。踏込入り「ヤア大胆奴ぐ」引ずり出せ。大きさんが腸ふ結
の。古足を偸む大盗賊。「つ」筋骨を抜で。中と 各に

嘈と罵りて。重三郎が袖を捕へて。
囲ふ袖袴を潜りて。重三郎が腕を外
へ出る。源三助が行衛を。帯大三の親方と。袴の小袖が
身を偽て。内を候へ。その体が。ヤアその盗賊をふ者と。
ソレ者おのがせ敵き敷せと。幇間赤社が追従が捕へて引
出し源三助。おるを人差へとらへど可ぎ。上を下へと返し
けり

鶯塚千代廼初聲初編巻之上終

鶯塚千代廼初聲初編巻之中

東都　松亭金水編次

第三回

裏下小源三助。金く人遣ふ者を。拾めようと。初とべ。
て手を拳てあ抑め。アヽモシ〳〵お方。解まり鹿忽
ちいぢゆアあのう。吾倆が仮を知るものゝうトいへども可ぬ
幇間。ナニ。知ら。移へふ抑が生て。自己が旦那の揚代
ホ。てあく太夫を引ぱり出し。生馬の眼を抜く程の。

通して来るものゝ拳を抜つて打かゝる。ひ方も脇ゝ不案元
の弱冠。彼者でもきゝ負べきゝ。身撰をゞかゝけゝとゞ思
へば喧嘩の仕方教れて。対身ゝ有ゝべその御食ゝ不案元
とも出来ぬ。ある身の仕方。大苦ゞ肝心性悪所
こゝ。ゝ人かゝとも向ゝせん「ハテサテ行相も少教ゝ。弟
左相ゝ白ゝ。吾俳ゝ逃ゝ隠ゝ弟ゝ静ゝ乳
あせ工酒狂のゝ人ゝ知ゝ弟ゝぶ。そゝ丈ゝ近者狂不ゞ
ゝどゝ可ゞ袖袂を。捕へて矢庭ゝ引ゝ出ゝ

條ゝて笑ゝる続ゝの。彼者離ゝ「裂るゝの形ゝ弦ゝ出る
以前の女。史ゝ見るより封閉者を。引除ゝ中ゝ衝立「工
ゝ。ゝ方ゝ行相ゝ。眼ゝ新の青板ゝ工。九ゝ
結ゝ。ゝ。ゝ重ゝ。ゝ吾俳ゝ客。
ゝ。ゝ。ゝ人遠ゝ。ゝ。ゝ
ゝ封閉者ゝ。ゝ。ゝ
ゝ帯ゝ。ゝ。ゝ「十二ゝ。ゝ歌妓の
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ

直ぐおからうぞ。モウ十日くらいこの廊へ。あっぱ稼りの九重
おつゆ。今宵のように成して呉れと。サアノ〜食物方へ素のト
いそぎとて幣用宗社どの。勅使〜屋へ来へ。彼お歌
を添て助ふうち。対じて気の毒なる。面持をして吐息
吻き「深ホモウ百姓おるて。きどお夜日を五ましう。先一
刻のお使ふとて一日ありけるとのまして。料理方へ言
渡しつ。お膳を彩くしてゆ。夜話で指ずあっぱ。お待せ
ヤて気い急ぐう。傷ふ居催促をいくて。ちょと行ぐう

噂〜強ぐいうう。来て見れば今の時宜。ラヤ生ア石物ゲ切
まきまくとぶ。ちくふ法ホ生蜂どの。怪我でもあろうハ仕ません
ろ。マア行ホろ吾俤の宅へお出ろまうてトさいまヨ。有ホ
ろ。扨ホ若ま毛ろう。行指ろ仕ろうあるませうト切ホを寄て
外へ出る「ナニ吾俤ゆ彼時ホ。亜ホ婦ま宜つぐ二階
の強ぎの西向さホ内蒲て居くんぐう。亜ぐ人遣ひ
で呼のと。ぐのあホ亜ア人前サ。ろ〜吾俤ア揭
故の情命。くる遣へうまちゆ。ヨア有ぐて〜秋ぐけと

で。お目もちゃアたまらん。彼見こそ御倉小兵服を
切目。何方と目どちゃア巻目まんだ。左指うと云てお前の
宅で。左分ふるのの目気の毒。何卒モシ。お欲さんと思つまの
宅で。外を借て。何指ふの目縁つけて。お兵おさうゃ。丈で宅
ナニと目ゆ丈難で。何の目立派ものがゃあり。「それちゃ
吾俳の気が済ません。宅に連ふ彼処の裏。こゝ一度ぐ
ゝ連れ帰れて。何卒来てお長ふさいョトそれふひゝと
て裏へ入ゝと。腰障ふ目宅あぐゝ「義母ゃお客さまでョ。

宅処を些左外ておゝ目。「左指ゝよく汗対て居るョ。者已
ヲ。丈が宅ふつて。サアゝ此方へ入ッまあいトいまて何ぞ
面目ふゝ「ナニお客ちゃアありません。マア義母さん出先
ふせエ。上目だお宅ゝ丈外の傷「早く消炭を持てお出エ。
宅延ぶふお方ゝネトふ殺で今晩の話しを為。何ゝ逃へ
て来る客子「モシ。何ゝふ世話ぐあつちゃア。何指もお兵
の毒でぐさいます。者渡この切まとこの宅結ろうてお兵ふ
さいナ「そうゃア今ふ義母。直ちくしてあげます。

マア驚いてお出ものヨトいふまり母い下駄の音。宮ものう
ふ踊次走出る一ちん不行ろおん祇ぐ乃ちもア吾俳間り
まもてぜ。アヽ早く飯まぐ宜うくこと不。後くとして居るろう人
きゑのお世話不当る一アレサ四郎老い出来ませんぐ。孫小
おお祖い人宗乳の。憑りいおこぐろう。蔭くッて
ませんぐ。文ぐろう只一口あげこと思ひますのサ一そもぐ
乃祖母お乳の毒ぐョ。おぢの落こと叔ぐろう。拾っておお
あげこのぐ。乃も憑りい欲も祝へ。岩無ぢもアありませんう一イヱ

方祖でありません。ぐ祖本秘ものあい物ぐけまどこれでも
沽りもア三両も。四両ものもアありませうサ。文を拾つて行処も
でも。逆うみて来てお呉ふさる。四生切と正直ふ。所ふ私い迷ひ
まくハト子海分妓のてふまど。物まさんいま人もかいこざる
ふも祝うさうに教をあけてさー俯く。この時母い帰り来て
一お前も今来るョうく火でも発ー赤せエ。まア。お祖ふ
ゆまぐ。祝ぐる麻赤人多まる遠。お性赤でもあさくあいで孫
不宜ぐぐいまくこ子。四存いありまもくまへぐ。アヽ弟さんろふ

源之助

不測の因縁
源之助

お方ハ。何の招いて四月から金招で。この次大招ぢの九郎さん
不。堅落て毎日の雪ふ。ちきひあさるゞ幇間も。幸に出忍に
ありまんゝ。彼方のこゝ中仕と。ホニ刀祢さゝう何ぞの雪ふ。
お悔落をあまんのサ。九郎さんいまゝ重さんとゝふ。涙い
お方のあるこゝハ。世間でもよく多つて居まんが。何ぞう除
まりの生ひるこで。四月勧進ふ赤つゝ。そこで今ハ表さを
て。逢ひあるこも出来ぬ。お互ふ乳を探で。居あさると
吹まゝが。今夜ハ誰ぞ幕を切て密そう逢しゝとゝさえ

まをゞ。史ゞ初もるゝ逢をの通り史でもマア重さんゞ。ちく果く
逃ふまをつて。格別お強ぎふも。ゝるゝで空ごぞのまゝ。
代ふ四迷惑を。ゝふお方招ぢもゝ私ゞ来ない
ふゝ。行和う落つてあげませう。ヲヤ〳〵と見ハ行ぢ切れ
しまるもヤ百〳〵お生ふまをつちもヤ。縁惜うぞのまを。アノ
お方縁あゞ。行ぢお貸まゝし。ゝ云ゝ前ゞ女の物者已
お客さくさんあけりヤア。宜「史ぢヤアお乳味ゞ悪ゝとも。吾
俳の胴ゞを呂せ中さう「ゝくゝ見ゞ空サア。お方招。

苟且ことをおたのみ「ハイ」
此招ぎ立派おんぢゃ「ナニ仏処ぢ立派ぢ乾ろ子。サテ
早くお芝更ぎ「ハイ」
芝せ更て「ヲヤ孫ふうくお仏食ぢ天ぐ仏処のう猫故の
備イ。寝衣ぢ「ぢまうこうあるませう悔くくいト
小袋でのひ。腿のあうを怪く凡る「アレナ要ぢ天りぢゃア
ぢへヨ。のひ母の方を向き「そんぢう仏の辛四面倒でも」
ハイ空ぐ出来ませんぐト行燈ひきとせ眼鏡をうけ。

後ぢ「ぢまだ孫ぐ助。火鉢の孫ぢ居ますぐ。ぢ孫ぢのう
身を傍孫ひ「おお招のお前ぢませんぐ。今夜ぢ腹ぢ痛
いぐぐまへ向ってお出ぢのナ「仏招ぢもとまでお世話ぢ
ぢのちゃア「ア好ぢへお否うエ「ナニ世ぢ否ぢゃ出へぐ」
お内室さんぐ結くお出う「ナニ言招ぢのあるませんぐ。
招ぢて来て左招様くお世話ぢ居ぢのあるちゃアぐ「モ
ぢくくのお招。孫ぢ意孫ぢのねエト孫ぐ助ぐ將指と食
指を腹ぐ抱ぢ抱ぢ「ハイお洗へト思へ母ぢ針孫をおき」

ぶんぶ　くま
大家さんのおうちを見てうらやましいと思ってお
殺つて居るうエ。湯に並ぶかけるが宜ョ。婦酒瓶に猪口を差い。
金延の指の上ふあるヨ「アイヨ。そうそやア宜ごとどりやア賠い手。
アノ長屋おあの方へい。湯屋をつけて行ぬ。ろちへ借てお
呉でおいう「アくそうやア仰指でも宜ご。こち方い湯屋の方が
宜らう「餘まり用ろうて私ろう「マアそうでも女
ぶ。私ろいと成ぬて居るうエ「アレはア彼指とおいふョ。
あやア金指小馬口連ゝ和エ「金併左指ぢやアまのけとど。

近曾この活業を指めてうう。滅吉利と唐面皮。妹小人が
悪くあつてョ。アノお指お吹あさのまり。指めてお月かつて
お方ア。棚御ーでもございませんが子。私共もお方ろう。ム指お
対でもございませぬ。彩でこそあれ田地も指てきと
まりこが。見の見が放蕩で大借金を指へまりて子。遠へ田宅へ
由他おくあつて。潮ゝ月が光ろいてゝ。こうとまで公治遠で。
樂小忍を入まり。モウ見ろう。改めて放指いてません。縁お
ぶう田地田畑。ろあ寺入ふいうて入ろとば。成る前い嘗日ま。

どうでまの土地ゑい居ることを私。見ることを他名杵をいさ。五
年が間ゑい捻一筋の侍ゑあつてお用ゑけ。何の卒文ゑうで
両個いまゑ居て絹織ゑ。貸計綿してあつと。燈を立て
居て下さいと。丈りく涙を流して。実ゑ先非を悔んで
容ゑ。丈ゑうこ方の思ゑ。骨折て人てで宜先祖ゑう
して居る土地ぞ。何をしてゑうと母ゑ両個で。善さうとあい
てゑいと。出て来て涙で両個が。実ゑ。ゑうこ郭い気楽
でゑうかうして居るうち。このお家ゑ十七八苦ゑの中

で日清孫屋ゑう。こ法まで仕てこまして。ヲヤ鳴が美詰の
ゑョ。お家ゑ考く湯ゑおさ。面白くゑあいお話で。四酒のお肴歴で
走りてまゑ。まア一ッあげ喜せう。モウ吾輪ゑ大きゑ辞まゑ

第四回

「美毋モウ。ゑの話ゑ。宜ゑてお仕舞ナ。「居相さウ人さゑ
ゑ。まゑしゑ新が何ゑゑゑあゑ。ゑうこ。ゑけとどおあのゑゑ。
ゑゑ。竟婚ゑと出ゑゑ子「ゑうこと。限ぢゃア気ゑかるゑ。ゑゑ
さんが十七八の。花盛りの仕ゑて。喫ゑゑのぢゃア。後ゑ

くゝ義母さんの招ゝ赤きもつこエ「モウ止とりやまんくゝ」
赤ホサ正ゞとお話しあさのヨ「とまろゝ子おお招邑の若い
若ゞ世話をして。聟吉郎を招めまして。後ゞであり邑
ゝゞ。荘屋の小見形ゞ色男振て。隙まゝ威張さりんざゝゝ。
大揉ゞ出来て義の流ゞ。侍て加ゝて小見形を。半数ゝ小新
まゝゝア方。そ処ゞ荘屋さんゞ大小騒懐て。脱のこ宰住の。
二三人日出来る処を。大勢人ゞ逆入て。ゆゝく内洗ゞ出ア去まゝ
ゝゞ。元いとりへゞお方の。聟吉郎ゝゝ記ゝこゝ初て居て日
ゝ。あるめへ。一年ゝ二年ゝゝ。ゞの処ゞ住て居るゞ宜ゝ。世話ア
まゝ人ゞ云まんくゝ。そゝゝア孫小遊ゞ。ゝちゝア見まゝゝゞ
長ゞりんゝゝア。揉まゝゝゝ。ゞの居へ日あゝ。ゞの日居招まゝゞ宜
ゝ。ゝゝまゝゝて云て居ゝ。そゝの人の新日洗さゝゞ。まゝゝ宿
ゞ家屋ゝきゝ。邑内へ新けて。宿て。ゞの処へゝゝ宿日あへゞ。
この廓ゝゝア義志ゝ人ゞ。二宿あゝまゝゝゝ義へ来ゝて
侍んゞ新ゞ。丈ゝゝ歌枝ゝゝゝゞ宜。鄙小居て師匠と
ゝまゝゝ。義千宜ゝゝゝゝゝゝ。この話葉を招めまして。

モウ丁度是うけ二年。其処で兄が左右云ふ。五年も滅ぶが
立身いと出でいんぬるが如き。他の処へ居るとらん位。
知らんとの宮さうあること。何ぞとらんと思ひ個でやて居つ
てもの一向消滅あり。先ず風の仮りで吹いば河内略世ろうの人
別の。郷用さ衣小者宮にて。也抱且那の乳小入て。牛の
然ひも鼻とぞう。モウ堂で出引立小あらうこと処を運の
甲斐あさ。且那のお供で吾獨の方へ下る途中で且那い殺
さも。別へ四周のお金を。二千両とう盗まりとて。云秋あさ小

腹を切て。死ぶこと人場を笑。正美あくば大変と。稚くふて
笑まもけもど。モウ腹見一年うくば。実正が分りません。放蕩
をする時名小。いつも死で仕まへば宮と。悔くってうぶるあぐら。
うん小老恩が消まし。月が差て幸抱。そのうへ且那が不
意の拍子小。秋あさに腹を切こと。吹て又生びまこ所老ち。
簡拍まうんとまおの子と。勢ろ
性まい土百姓侍小あつて立身まると。ふひ老ふ抱あつて。麦
下に腹を切こと。ぶまでら侍小。あの切うと。乳健赤奴と搦

くもありまくこ悪さ。お家〜まきつて下さいまト不同結を
きく添く助。さてい松原作をつい。このお方はんあつしろ見い孫
小不測の因縁。忍べちんか水性を活る。欲枝活業あるとバ
くて。今夜拾ひて新アく〜山外小。形別〜ちく物のい。伊招
まくうつと底気味悪く。忍ひうく〜ガ殺まで。作ちつぎらあい
せう。然らば残らんうち明て。拾らんうまあひ〜ガ。左招くと
あくぶ母。緒共さくく伴ろう引取くろ郎て母ふに苦労うみ。此
方小母まくと私食ガ悪く。まづく今育い方〜私新母小母話〜

面白く。後日小いくと母采ちい家ちと。胸小収めて大恩物さ
陳
一とろ夫ア苦労を初出さつこ子。係〜兄さんのこの落い。伊処
くくお伝ら考くあいぶ。赤偽の嘲〜小ア。ア遠ひ母沢ひあるの。
ア。私ア。イヤ十二猪くあるア。ア乳の遠ひで。稚くく小老へるくくる
去招くこ親母ある工係あぐくく家風〜きまで。猪て居あぐくく
こ延小母居くと。ア〜て初晩小客の械猪を。取て居るの
母百麻〜い子。然けまぐ甘美ものい合飽さ美ア忍ア伊
き次才ぐ。ア〜るくいい郎ようまく結様小こ母あるいサ

がおお招きう仕ぶ。何日昔芳いあります。後ふ音ごをまま
ちたヨ。私招ふ方技流ぶ。食事乳ふ教をて。面白さうに
弱めて居ちたぶ。何招ふ。内証の幕ふ絶ぶ。
仕ません。「左招ふ子何ぶう招ふ。乳楽ふ。及ぶ学
「まぶう。何慈藤のサ。ぶ。楽しぶ理ふ。何ぶう酒
ふ日酔あ。ふ。モウ。主招ふ。招ふ。止て。洗ふ精ロ
らせます。「吾俳。全体一向ぶ。ぶ今。
深ます。美大きふ。「ブレ甘くふ。云ふ。深ま。ぶ

遠ふます。何ぶふ。ふ方ふ遠ふあります。
何処ぶふ別深ぶ。ふ。ふ。ぶ。楽して。ます。
「イヤ大遠ふ。別深。ふ。廊。ふ。ふ。招
ます。全体吾俳。大吸の尼ッ。ふ。居ます。近
「ヨヤ左招ぶます。ます。ふ。ふ。
お。ます。「ナニ。用日あります。七ます。ます。人
日あるぶ。モンとふ廊ふ。菖蒲て。居ぶ。ます。
「その菖蒲て居ます。何招ふ。ます。

男爵者ちまち娼妓家の。奉公人でもあるまいと「ヒヤ、
全相お者ぢゃアあり。実いそのの人の新内だけ。知らぬ人
宜ぶんぢゃ。左の小指がない。右のそのの小指が無い
の走。紙縒ありて尋ねるのサ「ヲヤ吉相うエト考へて」が。
幸大きく呼て客不申。打首出てくるある。今思へば左
の小指不立方ぞうの元ぢあり。小指のこと気づかぬよど。
美者をもとめあるねうと。名ひ家ぐらも定ぐらあう紙ぢ。
吹きて跡いそぐ「モシ申こそ相お人を見うけこう。

亜知ってあげませうト強しあぐう不飲む酒も七八合
の酔ひ。このこと酒く結ひ出来て「まあ〳〵ことでこんッ
とも有く。なのぞうおいあるまこと「とまいエウ有ぐう成
ありことぢゃア一向者をあの。ドル美女ぞうト立ひかるを
お方ハ有て「モウお方相ぢで帰るこい出来ないこう。
泊りとしお相ぢこいヨ。左相きそうゃア美ろうぐこも。先を
亜不寝衣不ぢこいナ「実ぶとうゃア立派きぐて。
美くあるのも心祝ぢ。美浦しでもきることあい「ホニそ

つまやア接ひませんぞ。左右お品おかちるあくぴの品板ホ
あそこのナト刷くの下品を出ん「丈ぢやアこの方をお備ヤ
さう。サア美妙さん」ツおあごア。俵〳〵孫ホ活べあくて「冊
ハイく」見うく頂きませう。彼も杉角左右ヤまそうく。愛
へお洞りとあさのまー「モウお弟ホじらうく。床を安て
あげてお見ナ。ぞうせひ祖ホ狭ひうく。押付合て寝るぶ
宜。アヽ吾俤も大きホ辞さ「丈ニ」おあうく欣弱ヤー私へ
で。吾俤ぶ大造欣ます。丈あくお世話ホありませうく。冊

左右ヤ〳〵お休ミあさい。おく〳〵蒲団や小横が汚とて
お気味ガ悪うらう。法ホ備まべ幸藁ホのヤおくまんけ
まど「丈ニ」ことが結構サ。ヒとぢやア吾俤へ「ア、ヤ方
へお休ミあさい私きやアその服へ寝ますそう「左右ヤ
そんあう四充ホセエト寝まべ手処笛を片付て。冊ホ
俱ホ想ミけう。かくてその夜も明け見べ。冊へ起て火を焼
つけ。茶を拵へて朝飯をさてむ。麦下お方ハ涙ミ助と懸
祝ヤ小刃形ミて。寝くしハあくあくうを白くて眉秀

海の
多くの
遊女を
源之助
悪人のなかつて
源之助
恋敵ふ
迫る

夜みせよりハ鮮明に一段増る人品骨柄。惚々として帰
ものハ顔をに辞とかゆへども。然りとて何処の何人か。それ
と人知らで尋むべきやうもなけれバ端なき。世の在さまを
心に感じ若その人の名があるべけれども限りに申すべからず
と名残惜さハ絆端ども。打ち帰らんとの人まづに。まづまづく
近き不尋てよしと云ひ含む眼に執つ日まで見送
つて。本宅ハ裡に入りけり「イヤ おかみ彼人ハおおハ何ぐらう
と云ふ町人であるか 農夫です。何でもあるまいア おそのの。舎

顔はそのぐらゐ若い年ハ往たのが中々発明な性質。
あんな大坂の片端にあさると云やアしけ「左様さ吾
條もさう思つたヨ「それで可哀いこの廓に背旗て居る人
を尋ねる名もあるのが紙もあるのハ元があつて小指
の有る人と。何指かハ訳ぅ兎も角アおれの。絵草紙ら讃歎
お前ぅ歎でも崇めるとしやれ小咲するが。まづまう左指らハ
うらでもあるまい「何指も丈いうてよくあるのが。アノ番さんと
外にお客のでつちの小指が兎ども名つけましと袖口で。

多く用ゐ来るうらうらく初まるあんぐぶ。彼人ぢやア あいう
初うん。今田お殺し きへ出さうらく気をつかつて ばかり。
史を殺きうつと。ぶつつぶ滅ぶ。ぶつつぶ
あいつと。ぶつつぶまアと言て居この世。美人指あつぶ行
の欲ぐう。今田米ぶきつつぶ。ぶつつぶ母ぶ倶ぶ嘗
きつて。まつと来る日をぞ候ふける

鶯塚千代廼初聲初編巻之中終

東都　松亭金水編次

第五回

並松の風蕭然として。淀の河浪岸をあらび物凄き
封疆の傍。竹の柱のその長くあるぶ。まづその。もるを欲
ぶて。見をきめて深く助入口の薪まきあげて。内ぶ入
あぐう　ぶ今塚うまつ。彩て五六日出ぶ彩てぶ。
お淋うらうつと。ぶつて。気ぶあつてあうませんトいひ

狭きふねのうち。蓬屋風をひき除て日。何はもとけん
毋ハ病ぞ。心色をつくるふ火の気日あ。鍋の下さへ昨日
今日。焚くうるさゝふあらざれば。心頻ふ顔倒し。ふ風
をうち出来る南ふを。眼の色くくうけうちつんやまど。
丈うとおりハ新日あ。何振いうるく弱るけど。雖ふ同
べき人日あ。遠方ふうとて思案日つゝ。然あうまる
火を焚んと。薪ふうき寄せ麓をうち出し。燃つけて
ち処ふ跡ゝ。で悄然と魂を日。抜きもゝ出さえて。

実時あつて此方をつくるふ。深ゝ人毋ちうと。ちうる
文のあるをつんつゆ。取揚てあ。載き。拵くもの名日
ハ急ぎ。封かゝ切て。続下仮ふ

さて日つゝれ〳〵運拙あくて。かくぞう参ぞて。
命ぞあるぞ和日ふ。ハ何そ知でとものふ。ふく
名人作あゝ。人並我ちうとの者ハ。名日の身
ゝ和ゝ。思ふふ通ぞ通日あるゝ。あくく情
らぬ身を存命てけんまゝ日。そゝゝの和とうふ

きづよくおもへばこの身世をもとの親も自由ふ
あるべし。彼大なる坊のこゝろ不助けしるるとあり。
かゝて月日と経ふ。道にハ爺母へ不孝あり。国てハ
身ハ光悟を究め。淵川へ身を沉め。夫婦ハ二世と
咲ゝハ早く爺さゝのお伽へ来り。翁てのお結
ゝるのゞ楽こゝろでハ手を大あのてんふ
かゝる妻あけ見ハ夫を翁と地を走り。一日もあく
本望とげて。後生の妄執を晴させけゞ。ゑ

ゝ親ゝ為ゝ通ゝ事ゝ。然あゞら尾羽うちかゝ。
今日の便すあきあるふ。ようお湯ふを配ゞ。
写きふ能き憑りき。方人あゝべきをさ。
彩むあまゞて智恵ぞう。見者のとハ中さゞ
ゝ。若て和のゝ家ゞ年若きゝゝゞ
ゝ。血気ふ。仕様ゝ。夫あゝと後末
を。ゝくあ業ゞ恩ある。仏のゞを手遂ゞ。母が
今度の縁云ゞ。ゝくゞ笑ゝさゞ。我くゝとゝ

今さらも心にかゝるは親のなき八荒様
海の。浅の真砂の尽しなけれども心のまゝならず
あらく先立しゆるしたまへと
母より
浪どのへ

と涙半ばにて疱気のごとく筆りのてくれ涙に出しし躊躇しゝて
うち歎き。倒れ伏しまゝ合掌と共にて。お後不覚の体なり

きづかひありて心のうき日閉ありけるが何時ありやしも六ッ
頃ぐ瀬川とはまちへ間ちかきこの淀河辺に知難のあらん
かしと涯を出て乱執なまる枯芦を搔わけて。探ねど
更に知れよしあれ。日暮て泣とうち伏りしさて淵に身
をなげつ。作ぬなが妹に身を落てる物語。そも不慥にてもとの緩のと
を商議ありくべしと。廓を出しよりさまぐ節へ
え沼も中々で足をとりつる不埒なしものゝ此時ぞ世の楽しこの苦し
この身。釈と憑に於ずべきとて。取逃されて何せん我身の倡く

この河へと立揚りしが。ヤヽしばし丈夫は母の心に背き。まさに難
ありて父の怨を晴らさん人のあるべきぞ。無気にあやまり
過のおもひ人を棄ずは。すでに刹そのことあらんと。忽地心に立
沈み平常母の訖けたまふ遮莫風のその中へ。悦光を送へ
筆を担で南無阿弥陀仏と絶叫に念じ。住ぞの
夜も明て思ふ事ハすぎとの小座も開きてのあく。排狼
アヽて河へ流し。この身を上より朝日定めず。通遊して数を索
棋ぎす。あぶら国らんは。甘旺盛風に竿さゝり。弟丈を見へ本

元のさき名を。佐にとのへと大丈夫が話し。殊に今ハおのずが母の話しに。
自ら大定なる。縁ども。何招して。鉄の金持と。噂さへこゝまで
耳觸あり。丈夫を探る究竟の者ござんなれ。欲あり。今より
あきて佐吉来つゞ。一伍一什を委く明さば。丈夫も犯ぞ佐
かの女子が為に。中敦世の深更ハあるべからんと。大いに思案
を極むるが。イヤまて要勝と胸に手をおき。七人の子あれば生す
とも。女にハ心許すまじ。むかしよりの誡めあり。此夜の話し一
点たりとも洩さじと。云ども夜は世界に縦さまのあと

孟宵
おいらく
おうめ
七切ふ同きて
お梅
心中を
かる

錦朝桜
菜虎

斗ヲ入レ雑〻モレそを不申せよ母子の心と人定め
申せど。瓢箪と大事を明〻為方一彼方の耳不入るあら
ば。害を出さとの史ひ〻ん。まづく且く宿子と探ア。
その上のあと世人史のこあ〻ま母うへの。世を去ふ〻日柄
申さ不。欲を探るを術といふの方〻彼処分ル女
の子不近付ん〻人の子の方あ〻ど。さ〻ば中陰の果るまで。
お不居て月を送ル。こ〻ん次〻小屋不居り。かしの粥のある
りど〻外へ申出ど者して。蓑掛を吊ら〻他い家。備ふの

紙袋分両以長柄者ゞ女児ある。お梅ハいつ〻ある編〻
ふ。不図深き助をつ〻初〻ようん頻りふ情ふ〻ゞ人の子ゝ
ふ申契悔ふて。残り情ふ申その日ハ泊り。まこと。表月ふて後
神明へ詣ふと例の他人ゞき連て。出るもそをとをつ〻ん〻ル
申ゞ。そ〻ふ史その場所不近づけば。そ処者ふ居ふと驚の
中。左右の蓑をまきあげて。ア〻ま〻ど申。逃てその人ゞ。とふ
ふ〻〻へ夫家へ。ど。まこ家何と申。注ふ〻く。居り路ふ申
そのごと。徒ふ泊り者て。そ〻ふ森ま〻ど申。眠ら〻ど。そ

この傷所不到で。実不思議とおもへども。何程しるところ来のまゝ。ふかき所へ間はず。度こゝろ感ぜて。新竜こうと偽りて。きこ神明へゆきけるとそこの傷を以あるゝ所源こ助は。花洛へとて発ち逐

又ようあり。さるべらよく意焦まて三田の食さえ甘美うゝ祈バ

筆ハ三まとも食ぬ日多くさわバ渾身も何とあく疲まて

果てん此恵しと。祝ふ忍ぬ日とそあらん。果て出入の医

師さへあるべ。脇を祝後を撰うてもとまどそとおりへ病ハ

又えん。世ふりへ意の病らひと。雖も知ら祈バ加持祈禱

頻りふ医者を換あどて。長若ハ兵衛若ふ疲ゝ。妻

のお牧ハ継ーき中。殊ふハ何卒祈ゝ治ゝ。

さへあれど。良人のお〻捨てへあるまゝ。表向のこ彼兵と。せ

治さるさあふ又せうみう。妹のお花侍女お歌ハ且いくも

業ても僕を離まゝ。食ふを勧め薬を獲ふ。信実

浅く仇ふ抱も。さらふその験ハ又ゝ。僅の日数ふ又

まふ。眼ハ隔四こ頻背ハ言く見ハれ掌の肉さへ脱て食へ

さる。この世の人とも思つまじ。ぞうふ饗を果くるまで。長
者い殿人歌きん「伺根ごお梅豈伺ご。張てけんる気い
あいう。伺を巻ても既振をふつて。塞いで居るが我慢を
ちて。豈ア物を食ゑが宜左根しまいと疾ぞう。沈ぶつて快
いあうあいぜ。コヤ〳〵お花自己が居るか。只茸小葉ふく菓
子がける。彼をまく持て来ふ「ハイそまこ私が」「ナニお花でも
宜更ようう。そう方い是でも麿ふつて。「数回も左根中
まんが。お殿へ気ぞまんと。却て思いと。主作まんうう「コム

史ちゃア徐方が赤のトいて角お花い菓子前を主こ気に
物来ふ「老爺さんこまで。ぞうの生ぞ〳〵」「〳〵を主ぞ〳〵
き根ふ主ふう「ハイ主ちうぞう」「水」を狩て盃
主宴ふ。アよりゃア雑ぞ左根ふ。辻浦の彩製で。蕎
菓子へ極彩色の絵を描てふ既ぞ。ふるうぞこうアア
斉羅ぞ。コウ赤梅こまこ。ふ伺と稜く繁用おと。主文して
掃ふる「ハイ。ぞうぞうぞいまま。コヤちんふ斉羅ぞぞの
まま子トこぞ一眼ふこぞふ。その伺ふ眼を用ぞ「ぞうも

国々の殿〻一ツ宛の[illegible]
けまで一ヲ[illegible]ア稚〻[illegible]
の食花ぶつ[illegible]。八[illegible]梅の剪へ光仲が通ふ剪でござい
まんれまこの琴の糸がぞまでよく彩奇羅ふ構まんた程「
ヨ[illegible]ふかえ[illegible]この隅のを四[illegible]。鬼一法眼の業
[illegible]。[illegible]の牛若ゆよく[illegible]
細[illegible]。[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]
[illegible]。[illegible]

第六回

長柄長者ハ病細ア〻。女児の新さをうち眺を一行ごと
行報ゆ容ふが乳障ご。若〻て乳ゆ宝業あく。[illegible]
ゲ赤い〻つ〻人ゆの。兵両個の涙の児ゆ〻の歌不美金う。
白浪ようゆ子不勝る。宝八赤〻〻方業集ふゆ載てあるが
実不方拾ヨ。自己ゆ世ゆ[illegible]長若〻ゆそゆ。金不不見〻
い〻い赤ゆ。我千金がゆ[illegible]。[illegible]ア座ゆ
同方の。出若一個〻ゆて見ま。滝不仏細い歌ご。モシ金

げんでこの病気が快方なるこゝろ
惜しからぬ。阿育王が七宝でも寿命と変ることはあるまじ
く世間いろ〳〵見聞もあれど一人貴き賤しきこゝろ
ゆく。見る度毎にお義さまの心根をわが身にも不覚
不憫を催ほして。俱に消るん地なり。金の有て変の
別は。今者はお義を先へ残しつゝ。お義は一人父様の後をつゞき
来て居る時不。お梅は若くして忘れ人老茶
さんが作る金ばかりで金なるこゝろ万両でも惜しく

あれと。ホン二親あるまじとて安心思ひ居て下さる
ようとこゝろ月あるこゝろ親ぢうが。編むあるこゝろ小紋羊吾
作の快あるて。四安心さをせこゝろと。指絵ばかりて居るけま
ど。作の用果ようの通り。隠くゝ弱つて往こゝろ。モウ長いと
もあるまいが。モシ吾作が死ぐこゝろ。老茶さんいらかも及
ぬん。お義さんにおあの歌まが。作ばごらうと思ふ。ジタガ
お義よくお使。親より先へ死ぬのは不孝あるがごと世間
の咎へ ホン二 そまを遠ひあるこゝろ。老茶さんかも

左船ヤ。脇まりお歌き拝ぎん。あと四美見ぎヤてか
ムとトいへさ息ゆきまぐ〜ある。お義ハ変て眼ホ泡む。閉
を拭あぐら傳へ傳ヲ「伺船ゆ平ス嬢の四病気を変ぐ
と私ハ思ひまモョ。お医者さ森の生作ホ。彼して毎日四
猫もあぐ〜ん。塞ぐでぐろヲ入ッ来るうち。お痩ヒハ来ル者。
いそぐ影合の人ゆ月お。あの多で日ゲ生ホ見バ。寝ゆ命ハ
おづうの。き処でお病ハ伺船ごとハホと見と極ぎことゆ
ホ。マア いそぐ伺処とて。伺ん。とゆ森ハと云ヲ木共斜どり

数年来医者を家業ホとして来くの病人をまぐけこけ見
ど古の四ヲ森ハ。彫しホ実ヲ合点ゲ往森ハと
熟〜と左船を仰まる。シテ人ると私ゲ頼ぐ〜冨船
でハ森ハと。気の毒ヲ多ゲあり。ん。けヒど。伺ゲ船して か
傳ホ居てゆ。ヤし悔さホヒへハ生さん。で四容ゆホ気を対
て。居ヲぐろりでぐろハ。ん。ゲ平。嬢伺ヲ森ハホ深く。ヒ石
ヒゲぐろハ。ませう。辻ゲ四病気の猴と森って。此船ホお
簗ヒ森まろこのごと。私ハ存ま。ん。ゲ大ぐ遠ハあり

まつまでまつ。若左指あるべうち用て。別くべつと乎作ちーナ。且
指さるものあまたなどまでホ。乎作りの乎を金さへ投うる多
あるべ物指ホるもて。ぬ。めすぬうホ被せうぬ。そまを乎
言て入まつて。若ものつるとぐいまくるまとて。半壌の乎
仰通り。出不者でどぐいませうト鐸をうけ乎を乗ふ
嗜で噛めるぬうにいそまを。お梅ハをで紙うしぬ乎教を問て
物いそ。お教い乳乎をつんでをうでいよく左指とるホ
ぞ。鍬の形をひき機ア「ホ」三半壌ものどまでホ

ヤまとぶうりませんう。ぬでも深くかんホ。思ひすてこぐ
あるホ遠ひあい。サアそのことを乎作ちと。切ホ問とて主忠
吶き「モウ 梅 ー 壁乎取までもつてまいくるつへけまで。鐸をつけて
伝切ホ。云て居るおあのひを。言ホまるもこれが深ぬ。左指ら
と云てこまでるつへ。鍬ホ云指い被ぐけまで。先ん神明さ乎
へ乎ぬりの乎。唐琴ぐ深書ホ初を助ケて長ものを食の
男。此指ホ身形いまて居るが。でく何処ぬうが居こ風ぐと。
不島ぬ乎ぐ指まつで。形ホ焼ホその人の形かちぐ服を

小紫然つきこまいの招しこと気の迷ひ。こまいも
食おんどを好こうつこって仏の招あるめう。アモウくちめこ。
ろくまいしこまのんで。寄あんだうてもの仏の因果。七の
車おろうが気小あつて。物でも多小忘れ。を処で表俳
ぶ明くしこ。前注仏のこうつこって。注方はい先へ名合。除
まうの中で人小もいそまび。仏の卒モウ出へこうこうってもオ
小虜縛つて。意まるまこの中のいの中で因果小遠ひ
あい先根ちまび紀ねう化小。注方はるのこんを究て。光

指しそうこ四根も強ぞ。ぐえ。代根小弱つて書こ。表俳の
秋ひが悩小時若と。実小病く出つて居ぶ。先根こ表こ
方面祝まこ方の数きを楽して秋を一通り云て実せる。
併このこいおおそう、雑小ゆ云て長小さ。表俳ぶつもく死
ご跡でい簡根でおつこさうこ位の唱彩しゆて変ト渕然
と泣て居るを実。お義ゆ演を推拭ひ「私ゆ先根ごうこと。七
八分へ楽まこさぶ脱まう未遠ぶうで。ぞ懐簡根でいぶ
ませんこと。ゆまゆ仏ごう小根らく困ときつてちうすこぶ。

左振ひろて又まさぐれば。外のまアまぐろて。仕振のあへて人
こぐさいません。殉合ふい老を支ろぐまで。ゆ。百を周巣と呼ろ。
外でもまつくとの口光悔半嬢のを才でいたいさ左振で
こぐさいませうが。人の対ふろて死ぬといふ極大変ふてくぎい
ませ子年竟生て振まべこそ。滅い恋い愛い怨恨ま義
理が欲のまゑふいのと。稚とふてあろまんけまど。死しで実
ゆ蓋ゆ。長い浮世ゆまづまの支限アまアそのてふ私ふ仕
せ赤ろてお気長ふ死ふい子を抜ぎ。ま。ヨ。元食源人と

一口ふ。ヤまけまでこその中ふいよの人が落合でそのやろふ
りのゆあ。そまま昔の彩ふゆ欲ふでを寃ふ為ふ元食に
ろ厭病疾の。やろふふろて振る人ゆあろまま。知ろふいで極
ろろ又るとこでの元食ごとろろてゆ。元ふあろ。く左振でふ。
先須のアノ元食ゆ。夜ロ。とふひ初つき。表然の表ぢ也アふいと。
私ふ又てろうまくこが。外でゆ彼ふ欲のある。元食ふ遠ふこぐさい
ませ左振して又まべ第一て。ふ。外通り。ふ来ろふいふ。
てゆこぐさいません。梅左振ふべきうでゆあらうが。香波一回又ふと

休所茶
大夫
揖茶屋ふ
来てちうよふ忠太夫

ちうぎ
ムロ食の
客よ
をき
ゆく

物世ゝ不。拙ゝとゝ強奔りの長病去者の面活ーと。ゝ不
指さー笑ゝ至てゝ。紙合孤ゞ惜つてゆ。せて所る田来ゝ方ゝ。
丈ゝうゝ見ゝうゝ不。知で者ゝ方ゝ色ト頻り不験を潤ゝそ
京勢。お義ゝ行ゝとゝ人ゝゆ。ゝ痛ゝ不。秋を
彼ゝうゝ。偖ゝ心著ゝてゝ。その疾の病ゝを重ゝと候ゝの
父ゝる忠ゝ丈ゝ。長者ゝ家の老生震。周てゝ義ゝ壮ゝ疾の
ゝを。紛ゝとゝめゝう。如ゝ行ゝせんゝとゝ不ゝう。ゝ丈ゝ殺ゝ。
さて怪ゝゝその拒ゝゆ。ゝゝゝ美ゝうゝ。世不ゝゝ

の次第。主人ゝ長者ゝ不ゝうゝ。ゝで不ゝ彼ゝとゝゝゝ。ゝ女児の
命をゝうゝ不。助けゝゝとゝゝ。ゝ家ゝ。ゝ食を聞不取ゝうゝ
然ゝどゝ。ゝゝ通ゝう。ゝの人の委ゝう。ゝゝゝ。ゝ浦ゝ沢の
ある人ゝゝゝ初ゝゝ。條ゝゝゝゝ。ゝ人ゝ。ゝゝ下ゝて
由大ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ探ゝゝ。ゝゝゝ主人ゝゆ
いゝてゝゝゝゝ。ゝゝ。ゝ不。ゝ彼ゝ処ゝゆ。ゝ茶ゝゝ
腰ゝゝゝ。ゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝ
鼻ゝ先ゝゝゝ。ゝゝ遠ゝ。ゝて。ゝ食ゝ

よく知る人のあらざれど大方と見ゆる者ある人あり。元ハ然るべき
武士なりしが父を討れその家断絶せしかバ乞食となりしと
いふ。その頃までハ母と両個で。かの並松の下に居りしが。母ハ俗
方へ縫ふけん。今ハその身独となり。鍛冶に出入りせしが大かた
ハ小屋に居て念仏を唱へ経を読ミてあるよし。篤と吟さて
こそお説が眼前にしかバん然しまき人の身の果なりざる長
者に物ぐるひ紛らんものとその夜さり出のよし長者に
かく見バ長者ハ是見て物さへいはずん。住ミ武家の果ふもし

今ハ路頭の有様て乞食なんが女児が不便さに。命を助けて
遣ひうるて。其ハ尊にまゐる鉄ゆいらくまい。五根して何まで遠からん
お梅ハ知れでありけ見と。実に自業自得とらいへの是非
があれと口でいへ下とまろご恩愛の習ひとかく。涙を潤然と流
きそひたりて。渾家のお牧ハ傍へより一くいむかつ。アゝかたき丈まぐ
二十年ふ甲是なの女児を看病したてひん殺し。丈よりかそれなど
まで不思ハ露ふ就いて居る根が武士ぞとかいふ事どうか丈夫での
気前どがあつてこの跡が願ひゆきなく。それ見て城らへかへるゝモシ

まくに投かゑ立ちゐりのるゝ。お梅と表個逃出て。美しの手も好
しと称のゝ。死ぐさ夫に遠ふ諸。で外実ぶよく赤いとゝ。新八人一個
の。命ふ損て我慢を出るゆ。夫より飛ふ紙細なゐいと。ちゝと文ア
左を改篤りと。四高後のゝ人左格と生ゝと。例ふかそれど
お梅ゞ身を痛ゝ殆ゝ後実仏お左吏ハ長既て頻ゝ下至
人ゞ仏を解き。聟ふせんとぞ勧めける

鶯塚千代廼初聲初編巻之下終

琴平中本店